

三河映画「ベンジョー」

北欧の映画祭で初上映

三河地方を拠点に活動する「三河映画」が手がけた自主制作映画「Ben-Joe」(ベンジョー) (137分) が、北欧エストニアで開かれている国際映画祭「タリン・ブラックナイト映画祭」で、世界で初めて上映される。審査対象となる上位作品にも選ばれており、注目を集めそうだ。(服部壮馬)

三河映画は、三河地方の映画好きが集まるアマチュア制作団体で、刈谷市在住の岩松あきら監督(56)らが中心となつて2008年に結成された。制作費はゼロから始め、脚本の執筆から撮影や編集、ロケ地の手配やキャスティングまで自分たちで行う。キャストもスタッフも全員が手弁当で映画制作に携わり、スタッフは、プロの映画制作者ではない一般企業の会社員や公務員などで

構成され、岩松監督自身も結成当時は小学校の教員だった。キャストも有名入ではなく、アマチュア俳優や演技初挑戦の素人が参加している。

大手制作会社に比べ、予算や技術の制約はあるが、「人とのつながりと、より良い作品をつくりたい」という情熱は負けていない」と岩松監督。延べ千人以上が作品づくりに関わり、10年以上かけて完成した第1作「幸福な結末」は、国内外



「ベンジョー」のポスターを手にする岩松監督(岡崎市内)

摂食障害描く「地方でも世界に通用 証明できた」

の1003の映画祭で受賞や入選を果たした。

2作目となる「ベンジョー」は、摂食障害に悩む女子大生・早紀が主人公。岩松監督の教え子の実体験に基づく物語で、摂食障害やドメスティックバイオレンス(DV)を中心に現代の若者を取り巻く社会問題などを描いた。

撮影は16、17年に、設楽町の旧下津具小学校(18年に解体)や刈谷市の愛知教育大、高浜市の商業施設「Tぼーと」など、三河地方を中心に県内約30カ所で行われた。約5年間で延べ500人以上が携わった。岩松監督は「映画づくりが人を成長させる。人とのつながりが、結果的にまちづくりにつながっていく」と強調。海外映画祭への出品も果たし、「地方でも、素人でも、世界に通用する映画がつくれることを証明できた」と誇らしげに語った。

タリン・ブラックナイト映画祭は、現地時間で今月3、19日にエストニアの首都タリンで開催。カンヌ、ベルリン、ベネチアと並ぶ世界十五大映画祭のひとつで、審査対象のコンペティション部門には、20作品が選ばれている。ベンジョーは16、18日に上映予定で、18日に表彰式がある。国内での上映は未定。